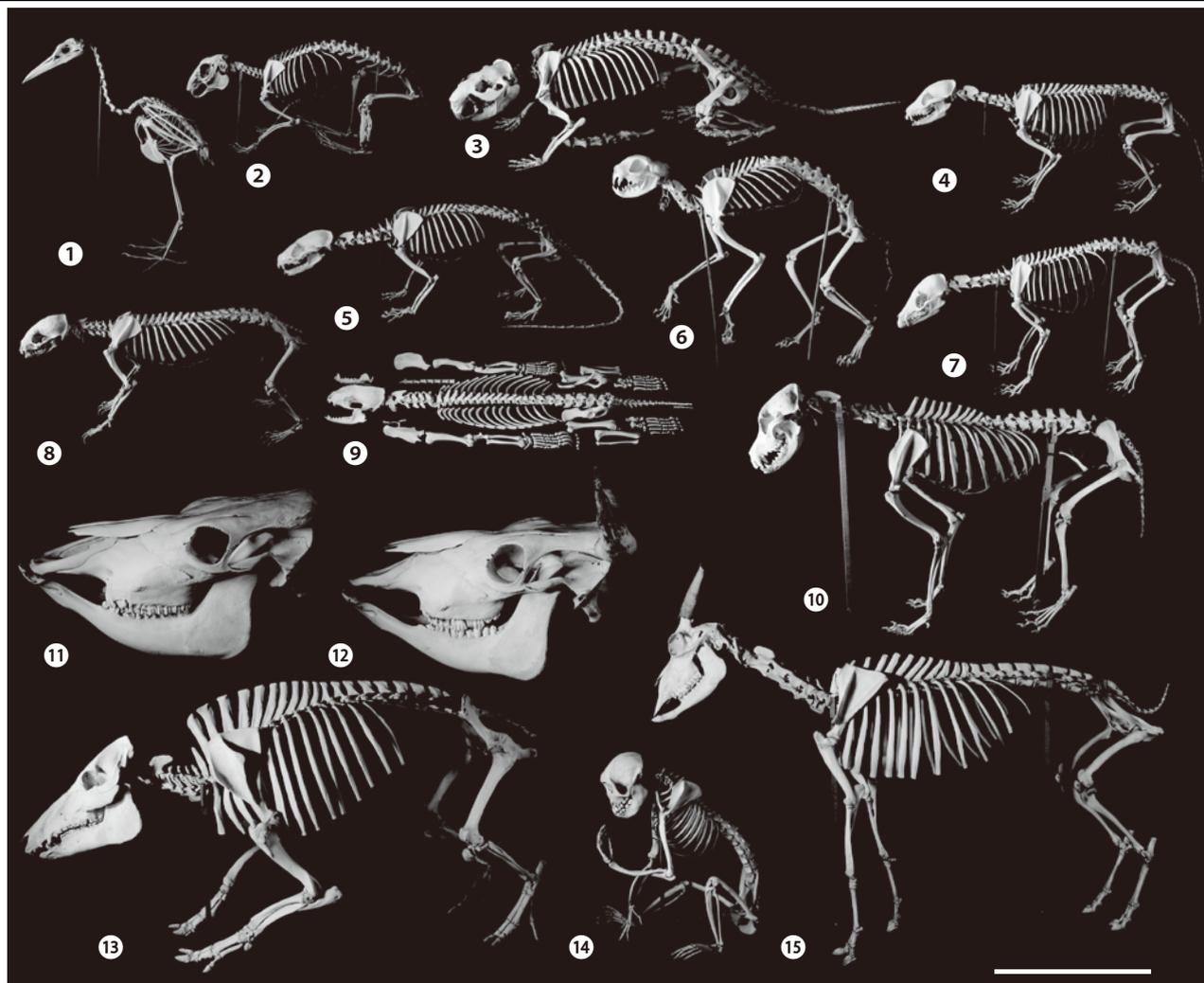


駿河ほねほね団活動報告

佐々木彰央



浜松医大から寄贈された骨格標本 右下のスケールは 50 cm

①ゴイサギ、②ウサギ、③アメリカビーバー、④タヌキ、⑤ハクビシン、⑥ネコ、⑦キツネ、⑧アナグマ、⑨解体されたアナグマ、⑩イヌ、⑪雌ウシの頭骨、⑫雄ウシの頭骨、⑬イノシシ、⑭カニクイザル、⑮ヤクシマヤギ

写真は 1970～80 年代に浜松医大の解剖学教室で作製された骨格標本です。標本は全 22 点でタヌキやキツネなどの野生動物の他に、ウシやブタといった家畜、イヌやネコなども含まれます。これらは今年の 2 月に『ふじのくに地球環境史ミュージアム』に寄贈されました。

標本には当時の情報が記されたメモが残され、ほぼ全ての標本がアクリルケースに収納されています。また各標本には台座があり、木製の支柱によって崩れることのないように固定され、各骨には針金が通されています。さらに、保存の難しい肋軟骨は竹ひごによって精巧に複製され、舌骨や陰茎骨など見落とししやすい部位も保存されているなど、緻密な作業が伺えます。

このように細かな部位と記録が残されている骨格標本は少なく、学術的価値の非常に高い標本ですが、経年による劣化ということもあり、移管直後は接合部の針金が断線するなどして、前肢や後足が外れていました。特に骨が重いイノシシにおいては、脊椎骨と頭骨のみを残して、ほとんどの部位が崩れていました。そこで、『駿河ほねほね団』の三宅 隆氏により修復作業がおこなわれ、全ての標本が作製当時に近い状態にまで復元されました。現在、標本は収蔵室で保管され、今後は常設展とミニ博物館の展示に有効に活用されることと思います。